

平成28年度 キャリア教育推進連携シンポジウム 発表資料

2017年1月17日



文部科学省



経済産業省



ひと、暮らし、みらいのために
厚生労働省
Ministry of Health Labour and Welfare


『キャリア教育推進連携シンポジウム』とは・・・

子供・若者の社会的・職業的自立に向けたキャリア教育の充実に当たっては、学校等の教育関係者と地域・社会や産業界の関係者が連携・協働し、互いにそれぞれの役割を認識しながら、一体となって取組を進めることが重要です。

文部科学省、経済産業省及び厚生労働省では、3省合同でシンポジウムを開催し、地域・社会、産業界が一体となってキャリア教育を推進していこうとする気運を高め、キャリア教育の意義の普及・啓発と推進に資することを目指しています。

目 次

◆◆ 発表資料 ◆◆

「第10回キャリア教育優良教育委員会，学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」	
受賞学校による事例発表	
徳島県鳴門市撫養小学校	4
「第7回キャリア教育アワード」最優秀賞受賞企業・団体による事例発表 	
株式会社博報堂	10
「第6回キャリア教育推進連携表彰」最優秀賞受賞団体による事例発表	
日向商工会議所	16



◆◆ 参考資料 ◆◆



「第6回キャリア教育推進連携表彰」受賞事例	
日向商工会議所	24
大阪府立堺工科高等学校 定時制の課程	27
一般社団法人三重県技能士会	30
講師派遣事業「地元企業からの学び」延岡市推進委員会	33
南相馬市未来へのつばさ育成プロジェクト	36
阿蘇市キャリア・スタート・ウィーク実行委員会	39

発表資料



第10回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等
文部科学大臣表彰受賞

大好き！撫養 ドリームプラン ～未来創造への旅～



徳島県 鳴門市撫養小学校

大好き！撫養 ドリームプラン
～未来創造への旅～

鳴門市撫養小学校

大道商店街



LOVE(豊かな心)・**L**EAD(自主性)・**L**EARN(確かな学力)
元気いっぱい みんなの撫養小学校

取組みの概要

平成25年9月「徳島県キャリア教育推進協議会」設置
平成26年3月「徳島県キャリア教育推進指針」策定
平成27年度から県内公立すべての学校で「キャリア教育全体計画」を作成



撫養の人・もの・こと

地域との関わり

将来にわたって
生きて働く能力

勤労観・職業観

身近な人々とコミュニケーションを図り、学び合う
中で自己肯定感をもち、夢や希望の実現に向かって意
欲をもって努力し続ける児童の育成

社会と
かかわる力

自分を
みつめる力

物事を
すすめる力

将来を
えがく力

5年生「かがやきプロジェクト」
・地域の先人の生き方から学ぶ
・「なると第九」を歌って伝えよう



1年生「幼稚園との交流」

- ・じゃがいもの収穫
- ・秋のたからものランド



社会と
かかわる力

自分を
みつめる力

将来を
えがく力

2年生「お店たんけん」

- ・商店街の見学
- ・働く方々との交流



4年生

「あったかほっとプロジェクト」
・高齢者、障がい者との交流
・地域のバリアフリーについて



物事を
すすめる力

3年生「むやのすてき探し」

- ・マップやパンフレット作り
- ・むやのすてきカルタ大会



1～5年生の主な取組み

6年生の取組み

文部科学省「小・中学校等における起業体験推進事業」指定

大道商店街
振興組合

鳴門商工会議所

鳴門市役所
商工政策課

ジュニアエコノミーカレッジ

株式会社の
立ち上げ

商品の企画

仕入れ・製作

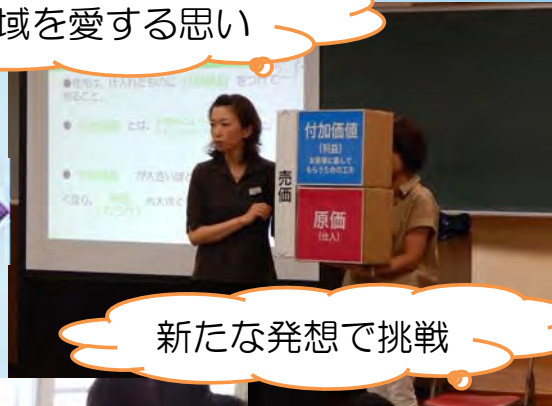
販売

経理・決算

大好き！撫養 ドリームプラン
～未来創造への旅～



地域を愛する思い



新たな発想で挑戦

買う立場→売る立場の視点へ

付加価値

予算
収益計算

販売方法

客層の具体化

安全性

衛生面

仕入れ方法

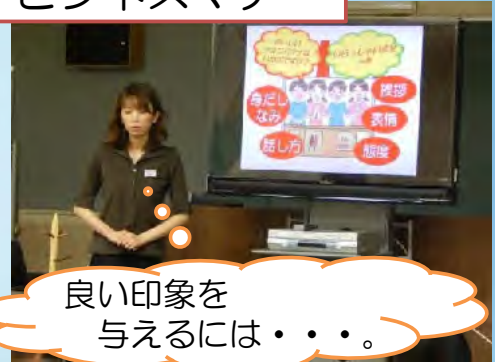


商店街調査



お客さんをもっと呼び込み、
活気あふれる商店街に！

ビジネスマナー



良い印象を
与えるには・・・。

店づくりプラン



イメージカラーで
統一することも
大切ですよ。

帳簿のつけ方

レシート・領収書を
きちんと保管しま
しょう。

日付	品名	単価	数量	金額
10/28	借入金	10000	1	10000
10/29	ブーメラン	1152	8	9216
10/29	水鉄ぼう	1152	7	8064
	アセサ	1448	4	5792
	ぼう	960	5	4800
	入部	480	4	1920
	ソム	960	3	2880
10/30		2160	1	2160
10/30	テズス	324	3	972
10/30	まちのどろお	597	1	597
10/30	ホルイア	108	6	648
10/30	ジャボ	108	5	540
10/30	カラフル	108	4	432
11	業務	125	3	375

出店を目指して一致団結！



ドリームプラン

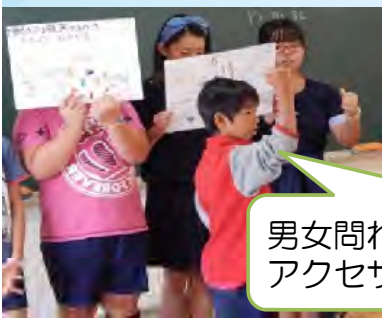
11社

4社 + 2社

商品プランを立てて、収益率を計算し、株主に対して自分の会社をアピールするプレゼンを行います。

出店コンペティション

プレゼンソフトを使いこなせる
ようになりました。



男女問わず身に付けられる
アクセサリを作りました！



小さな子供の相手は
僕に任せてください！

審査会議



商品の魅力が伝わってこなかった。

手間のかかるクレープを短時間で作れるのか。

ゲームに意外性がなく、お客さんをお呼びには一工夫必要。

焼きマシュマロとジュースのセット
売り値引きのアイデアがよい。

安い！何でもある！と
楽しくなるような店だ。

たくさん売ろうとする
意気込みが感じられた。

手作りの商品に温かみが
あって良い。

商売のプロ、校長、担任が話し合い、子供たちの意欲、これまでの準備状況、実現の可能性、集客予想、収益率などを総合的に判断し、100円商店街に出店する6社を決定しました。

100円商店街

○全員が一丸となって生き生きと活動する姿
○予想外のトラブルにも臨機応変に対応



○礼儀正しく接客，手際よく商品提供
○大きな声とスマイルでアピール



○小さな子供に対するやさしさ
○移動販売や値引きも実施



△売れ残った商品の取り扱い
△食品の出来具合の大きな差



全会社の利益合計→49,051円

小中高校座談会



高校生が販売していた砂糖をまぶした一口赤飯は、地元ならではの味付けで、食べやすかったです。



中学生が販売しているわかめうどん。鳴門わかめが練り込んでいるなんて、いい考えだな。

小学生は、大きな声と笑顔で接客していましたね。



高校生のお店は、幅広い年齢層に大人気でした。



当日は、校区内の中学校・高校と連携して出店。お互いがお店を訪れ、交流しました。終了後は、これまでの経緯や反省について意見交換しました。

成果と課題

- ・コミュニケーション力
- ・基本的な礼儀やマナー
- ・地域の一員としての意識

社会と
かかわる
力

ふり返る時間の
確保

- ・得意、苦手なことへの気づき
- ・進路選択や職業選択

自分を
みつめる
力

他教科・領域との
関連性

- ・創意工夫することの楽しさ
- ・問題の解決に向けて

物事を
すすめる
力

教育のプロと
商売のプロとの
役割分担

- ・地域発展のために
- ・学んだことを生かす
- ・将来への展望をもつ

将来を
えがく力

小中高との
連携の在り方と
継続



博報堂の教育プログラム

H-CAMP

Hakuhodo, Communication, Advertising, Marketing, People

2017.1.17

博報堂広報室CSRグループ
大木浩士



博報堂について

■ 本社：東京都港区赤坂 ■ 売上高：約8,752億円（2015年度） ■ 社員数：約3300人

博報堂は、 新しいアイデアを生みだし、
それを形にすることで、
社会や企業、生活者の幸せにつながる
新しい価値を創造し続けている会社です。

CM、広告
商品アイデア



博報堂が大切にしていること

新しい価値を創造し続ける博報堂が
一番大切にしている力

クリエイティビティ

creativity = 独創力・創造性

原動力

社員の多様で異なる個性

「一人ひとりの個性豊かな考える力」
を尊重する博報堂の文化

「粒ぞろいより、粒違い」

チームの力

異なる個性を認め合いながら、
「チーム」をつくり、
多様な発想をぶつけあっていく
博報堂のワークスタイル

2

H-CAMP

H-CAMPは、博報堂のクリエイティビティを、
「体験」を通して楽しみながら「実感」していただくことを
目指した教育プログラムです。

博報堂の教育プログラム

H-CAMP

OPEN-CAMP

「個人参加型」の本格的発想体験
プログラム。



企業訪問-CAMP

「対話と体験」を重視した訪問受入
プログラム。



外部との リレーション

- 1) NPO・自治体・学校と連携した
プログラムの開発と開催。
- 2) 小学校～大学での講義協力
※講演、連続講座、ゼミ

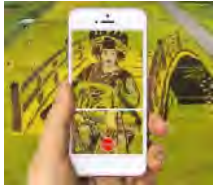
3

取り組みの経緯

多くの教育関係者にヒアリング

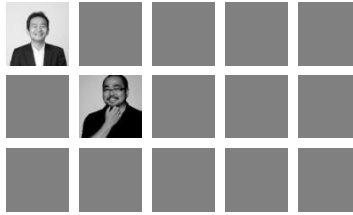
博報堂の仕事

クリエイティビティの力で
正解のない課題を
解決していく



博報堂の文化

「粒ぞろいより、
粒違い」
(他社にはない多様な人材)



創業時の理念

これからの日本のため、
青少年の教育に
貢献したい

- ・教育雑誌の広告取り扱い
- ・教育雑誌や書籍を発行



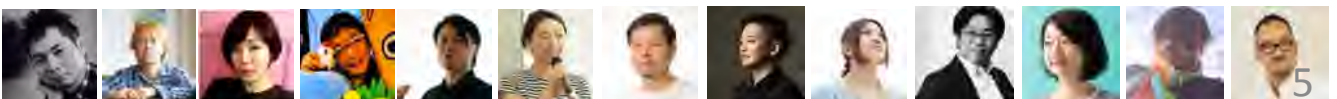
博報堂のワークスタイルや人材育成方針などが
求められている教育ニーズに合致していることが分かった！
博報堂と教育の親和性も高い！

CSRプロジェクトとして活動をスタートすることを会社に提案！ (2013年4月)

OPEN-CAMP



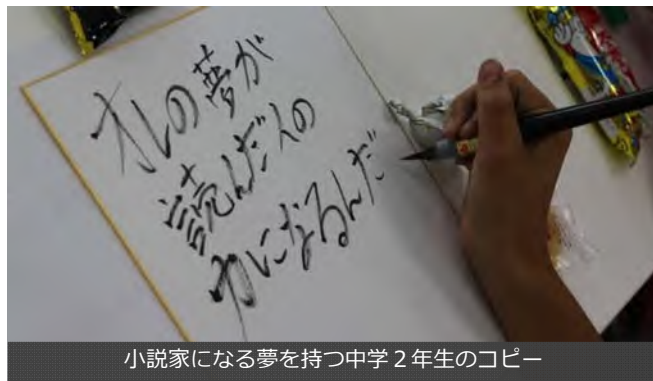
- ・対象は中学生と高校生。「個人参加型」の「本格的発想体験」ワークショップ。
- ・講師は第一線で活躍している、多様な職種の「粒違い」な社員たち。
- ・「妄想力」「自分の夢のキャッチコピー」「ポジティブ発想法」「新しい単位づくり」「コラボ商品アイデア」「常識をぶっこわす文化祭」など、現在までに20種類、31回の講座を実施。約400名が参加。



OPEN-CAMP

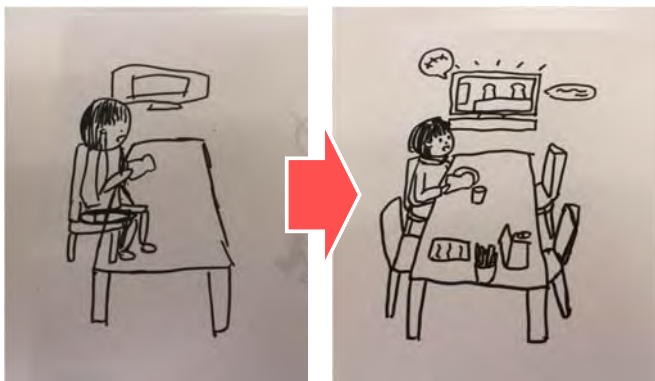


「自分が伝わるキャラクターをデザインしよう！」



小説家になる夢を持つ中学2年生のコピー

「自分の夢を応援するキャッチコピーをつくろう！」



「絵が苦手な子限定！伝わるラフスケッチの描き方」



チームごとの発表の様子。その後講師からの丁寧な講評。

「モノの見方が変わる！？ポジティブ発想法」

6

企業訪問-CAMP



開催回数（来社学校数）



これまでの訪問校



来社人数



- ・ 中学校・高等学校の「企業訪問」のリクエストに応えるプログラム。
- ・ 受け入れ人数は、3名～30名。開催時間は2時間が基本。
- ・ 学校や生徒の皆さんのニーズや状況に合わせ、個別に内容を変更しながら、「対話型・体験型」の場づくりを行っている。（後半は発想体験ワークを実施）
- ・ できるだけ「同郷の社員」も同席。
- ・ これまでの「企業訪問-CAMP」としての開催回数はこれまで218回、来社生徒数は約2780人、同席社員数は約90名。

7

企業訪問 – C A M P



前半は博報堂の仕事紹介



後半は発想体験ワーク（プログラム多数）



同郷の社員もできるだけ同席



同席する社員が体験ワークを企画することも

外部とのリレーション

NPOや自治体等との連携

■ NPOとのリレーション

キーパーソン 2 1

MET-next-



■ 自治体とのリレーション

東京都教育庁

大分県教育庁

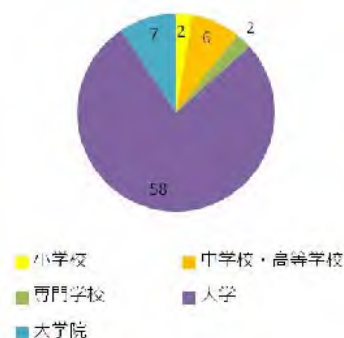


教育機関への講義協力



2015年度は、75の教育機関（小学校～大学・大学院）で、111人の社員が、のべ680回の講義を行った。（148種類の講義を実施）

◎教育機関の内訳



◎講義実施回数の内訳



プログラムの効果（生の声）

OPEN-CAMP

■参加者

話し合うことで、こんなに色々な見方ができるのか！

常識に縛られず、自由な発想を持つようになった！

他人まかせでは物事は進まない！何かを進んでやる
ことが増えた！

■保護者

プロからたくさん褒められたと娘が喜んでいました！

お互いを尊重する雰囲気作りが素晴らしい！

■博報堂社員（講師）

子どもたちの発想力に驚き！僕も負けてられない！

OPEN-CAMPがきっかけとなり大学の講師になった！

ワークショップの進行を経験する良い機会になった！

企業訪問-CAMP

■参加者

私も自分の個性を育て「粒違い」な人になりたい！

こんなに友達と真剣に話し合ったのは初めて！

他人の個性を尊重する大切さを学んだ！様々な視点
で物事を見るためには、他者の発想が重要！

■学校の先生

アクティブラーニングのよい実践事例を拝見した！

「粒ぞろいより粒違い」は、今の教育に必要なこと！

■博報堂社員（同席）

同郷の子どもたちと会うことができ、本当に嬉しい！

私もたくさんの刺激とアイデアをもらいました！

自分も「未来の創り手」をつくっていきたい！

10

さらなる発展に向けた取り組み

博報堂のビジョン



未来を発明する会社へ。

Inventing the future with
sei-katsu-sha

- これからも、①博報堂の多様な社員とともに、②そしてグループ会社の方たちも巻き込みながら、③できるだけ中高生や大学生とともに「未来の創り手」づくりに貢献できる内容にしていきたい！

- 「**未来の創り手を育てる方々**」への貢献やサポートを行っていききたい！
※学校の先生向けの場づくり、さらなるNPO等との連携を！

11

第6回キャリア教育推進連携表彰 最優秀賞受賞

「日向の子供たちの未来づくり」

産官学の高度な連携による「キャリア教育」



宮崎県

日向商工会議所

会 頭 三輪 純司

日向市キャリア教育支援センター

センター長 水永 正憲

宮崎県日向市と 日向商工会議所



・人口 62,747人 (H28.12.6現在)

・神武天皇お船出の地(美々津)

ひよつとこ踊り

若山牧水 生誕の地

・小学校 14校

中学校 7校

高校 4校

・日向商工会議所(1510事業所)

(重要港湾・細島港を拠点として、製造業が3割と盛ん)



「キャリア教育」への取組の経緯

- 平成24年 宮崎県教育委員会 答申と方針決定
「小中高12年間を見通した宮崎にふさわしいキャリア教育の推進」
・縦（小・中・高校）と、横（学校・家庭・地域・企業）の連携 ・地区キャリア教育支援センターの設置
大阪商工会議所、横須賀商工会議所を視察・助言を受ける
- 平成25年 日向商工会議所に「日向市キャリア教育支援センター」が開所（コーディネーター3名配置）
「日向市キャリア教育推進懇話会」が発足（年2回開催）
商工会議所常議員会、校長会、教頭会、教務主任会、教育委員会等と意見交換
- 平成26年 市内モデル3校（小中校）にて、具体的推進計画と検討
「よのなか教室」がスタート、「よのなか先生」登録拡大活動を開始
- 平成27年 商工会議所主催にて各種研修会開催（企業合同研修、新赴任教職員研修）
「キャリア教育通信」の発刊と全教職員への配布
日向市未来創造戦略（地方創生戦略）にキャリア教育が位置付けられる
- 平成28年 高校生を核とした「高校よのなか教室」の推進
「よのなか先生」研修会の充実（教職員の参加が増加）
保護者（PTA）への啓発活動に着手
建設業協会等の業界団体との連携

産官学の高度な連携によるキャリア教育の推進

- 「産」 商工会議所の強力なリーダーシップ
・人手不足時代を先取りして、将来の産業人材としての小中高校生の育成に着手
- 「官」 行政の先進的な取組
・「日向市未来創造戦略」（地方創生戦略）に、
ふるさとを愛し日向の未来を支える人財の育成を位置付け
（「よのなか教室」を核としたキャリア教育支援事業の推進を明示）
- 「学」 教育委員会による学校（先生方）との連携の深化
・校長会、キャリア教育担当者会、教職員研修講演会などの積極的な展開
- ⇒「地域と企業」が、「学校（先生方）と、子供たちと、保護者」をサポート
（ “学校応援団”を めざす ）

「キャリア教育」とは何か？

1. **フリーター、ニート対策ではない！**
⇒職業教育のみになってしまう
⇒若年者雇用促進だけではない
2. **将来どう生きるか、を考えさせる教育**
⇒何のために学ぶのかを考えさせる
⇒何のために働くのかを考える必要
3. **社会と地域の人たちの力を借りて、
すべての教科で、子供たちに「将来」を考えさせる**
⇒「総合」の時間で、核となる体験活動を組み立てる
⇒その上ですべての教科に展開する
4. **「学力」と「生きる力」を向上させる**

「よのなか教室」

「日向の大人はみな子供たちの先生」

- 新人も、中堅の人も、管理職の人も、社長さんも、
お店を経営している人も、農林水産業の人も、仕事をリタイアした人も・・・
- 現在200名が登録 ⇒300人を目標に登録拡大推進中

ねらい

1. 子供たちに「**将来どう生きるか**」を考えさせる機会を増やしたい
2. 子供たちの学ぶ意欲を高め「**学力を向上**」させたい
3. 日向を子供たちが「**喜んで住み続けたい**」と思う街にしたい

次世代を担う子供たちに伝えたいこと

それは、「**働く喜びと苦勞**」
それを、「**大人が本気で語ること**」



「よのなか教室」実施結果

<平成27年度（1年間）>

- 実施学校数 **15**校／25校
 - 実施回数 **96**回
 - 講師数 **219**人＋**92**（中高生）
 - 参加児童生徒数 **9020**人
- | | | | | |
|-------|--------|-----|---------|-------|
| * 小学校 | 7校／14校 | 37回 | 73人＋38人 | 3083人 |
| * 中学校 | 5校／7校 | 44 | 130＋54 | 4603 |
| * 高校 | 3校／4校 | 15 | 16 | 1334 |

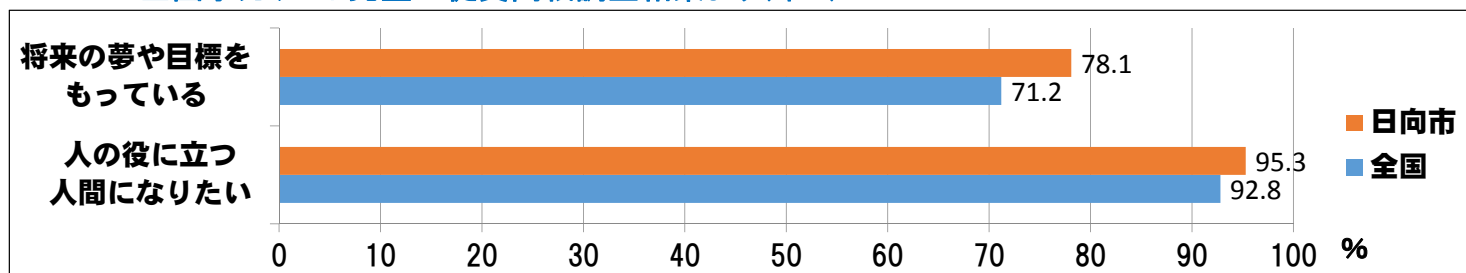


「よのなか教室」の持つ力

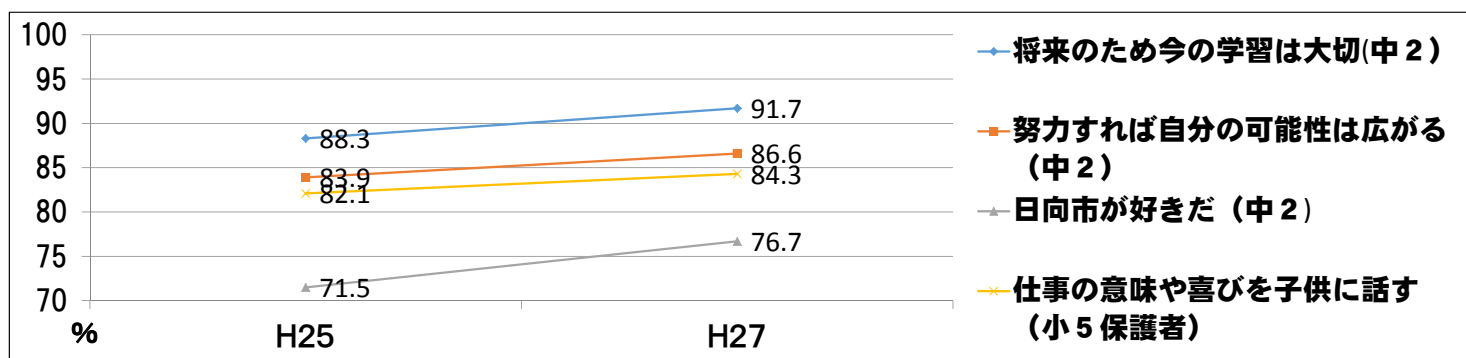
1. 「よのなか教室」では、社会人講師が決まったら、必ず事前に講師の職場を訪問して、打合せをすることになっている。⇒先生方が、気付き、意識が変わる。
2. 若い社員、中堅社員が子供たちの前で話すことで、一旦立ち止まって考える機会になり、仕事観を見直す気付きになる。⇒社員が成長する場になる。
3. 退職後の人が、「子供たちから元気をもらった」と。⇒シニアの人たちの生きがい生まれる。
4. 子供たちが、普段先生から聞いていた話が、現実のことと符合することに気付き、理解が深まる。⇒子供たちも成長する。

児童・生徒、保護者の意識の変容

H28全国学カテスト児童生徒質問紙調査結果より(中3)



H25～27日向市キャリア教育アンケート結果より(中2、小5保護者)



様々な工夫の継続

「よのなか先生」研修会の充実 (平成28年11月28日開催の事例) (通算12回実施)

15:30～16:30	キャリア教育教職員研修会 (市教委主催)	(教職員 23人)
16:40～18:00	PTAと連携したキャリア教育について (PTA役員、社協職員、小学校校長でパネルディスカッション)	(56人、内教職員21人)
18:00～19:00	「よのなか先生」研修会 (模擬授業、ベテラン「よのなか先生」による対談)	(63人、内教職員18人)
19:00～21:00	交流懇親会	(50人、内教職員13人)

「キャリア教育通信」の発刊と全教職員への配布

平成27年6月から毎月発刊、平成28年4月から隔月発刊(既刊14号)



先生に「現実」を 経営者に「役割」を そして子供たちに「夢」を

- * 学校を卒業していった子供たちが、いま社会の中でどんな苦勞を強いられているのか。
 - 職業選択の苦惱（フリーター、ニート、非正規雇用）
 - グローバリズムと格差社会
- * 卒業してから鍛えるのでは遅すぎる。
 - 学校に出向き、小中高校生に、働く魅力を語る役割と責任がある
- * 子供たちにネガティブキャンペーンを張るべきではない。夢をこそ語るべき。
 - 圧倒的な人手不足時代 ⇒人を大切にする社会に必ずなる！

これからの課題と展望

* 学校、先生方に生まれはじめた自主的な取組

- 「創発」（部分の性質の単純な総和にとどまらない性質が、全体として現れること）これを「管理」するのでなく、システム（DB、IT）を創る
- 学校において、毎年継承される体制と仕組みづくり

* 「よのなか先生」300人体制の早期確立

- 企業経営者と地域社会人の主体的役割認識の醸成
- 「よのなか先生」研修会のさらなる充実

* 保護者（PTA）へのアプローチ

- 参観日での「よのなか教室」の開催
- 校区内の保護者が「よのなか先生」になって「よのなか教室」を

參考資料



【最優秀賞】

団体名	日向商工会議所
活動の内容（概要）	本団体は、「日向の大人はみな子供たちの先生」を合い言葉にして、働く大人（よのなか先生）が子供たちに本気で「働く喜びと苦労」を語りかける授業を行うとともに、「よのなか先生」に対する研修会等を実施するなど、学校だけでなく、企業や行政、地域など巻き込み、産・学・官をあげてキャリア教育の推進に取り組んでいる。

受賞理由

- ・商工会議所が中心となり、「地域の子供たちは地域の大人が育てる」というコンセプトの下、街をあげて子供たちの未来づくりを進めており、地元の人々の顔が見える取組である。
- 学生の県外流出を防ぐため、地元企業経営者をはじめとする地域社会で、地元へ愛着を持ってもらう活動を進めている。
- ・産業界・行政・学校が課題意識や方向性を共有し、コンセプトの具現化のためにキャリア教育支援センターが大きな役割を果たし、コーディネーターがつなぎ手となっている。
- ・研修会、交流会等を通じて、共に学ぶ土壌を築き、多彩な担い手のネットワーク化を図り、事業の一貫性、継続性を高めている。
- ・「日向の大人はみな子供たちの先生」のスローガンの下で、小中高等学校における「よのなか教室」を開催するにとどまらず、当該「よのなか教室」実施前の学校との打合せの機会の確保、学校の教職員向けの「キャリア教育通信」の隔月発行などの工夫が見られる。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

日向市立小・中学校 23校、日向地区県立高等学校 4校、日向市教育委員会、宮崎県教育委員会

【行政や地域・社会、産業界等】

日向市役所（産業経済部、総合政策部）、日向市PTA協議会、社会福祉協議会、ロータリークラブ、放送大学、漁協、農協、森林組合、職業安定所、建設業協会、建築士会、老人会、区長会、民生委員
社会人講師（よのなか先生）平成27年度延べ219人、中高生講師92名

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成25年～ 【継続年数】4年

日向商工会議所は、平成25年度に宮崎県教育委員会のキャリア教育のパイロット事業と、日向市教育委員会のキャリア教育推進事業の委託を受け、「まちぐるみ」でキャリア教育の推進に取り組む活動を開始した。

日向商工会議所内の一室にキャリア教育支援センターを開設し、3名のコーディネーターを配置して、学校と企業や地域を結びながら、「日向の子供たちの未来づくりプロジェクト」を推進して4年目を迎えている。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

日向市教育委員会と連携し、平成25年8月に、日向市キャリア教育推進懇話会を発足させ、年2回定期開催し、産業界（工業会、農林水産の各組合、建設業協会、商店会、医療福祉団体など）、行政、学校の代表が集い、産官学を挙げて、問題や課題の研究・協議を重ねている。その結果、①「将来どう生きるか」を考えさせる機会を増やしたい。②学ぶ意欲を高め、「学力を向上」させたい。③日向を子供たちが「喜んで住み続けたい」と思う街にしたい。という3つの理念・方針で「日向の子供たちの未来づくり」に取り組んでいるところである。これまで懇話会は7回実施され、今後も継続していく予定である。



<体験も交えながらの「よのなか教室」の様子>

また、日向市教育委員会が主催する「キャリア教育担当者研修会」や「転任教職員研修会」、「日向市小中高連絡協議会」に参加・協力するとともに、「よのなか教室」に派遣する「よのなか先生」の登録の拡充に努め、「よのなか先生」の研修会、「よのなか先生」と教職員の交流会等の企画・運営を実施している。

さらに、学校の教職員向けに「キャリア教育通信」を2ヶ月に1回発行したり、ホームページやブログを活用して活動の様子をこまめに発信したりしており、教職員やその他の関係者との理念や方針の共有化を図っている。

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

中心となる事業の「よのなか教室」の実施にあたっては、学校からの「よのなか先生」の派遣要請と、派遣側の講師・企業とのマッチングやコーディネートと、ある程度システム化している。具体的には、「よのなか教室」運営要領について、ホームページに掲載し、周知・徹底を図っている。また、データベース（登録者、実施実績など）のIT化を進めるなど充実を図っている。

さらに、「よのなか先生」登録者を拡大することを目標に登録依頼活動を幅広く展開している。現在、200人の「よのなか先生」に登録してもらっている。「よのなか先生」を対象とした研修会を、平成27年度は5回、これまで通算12回実施してきており、「よのなか先生」の質の向上を図る取組を行っている。この研修会への教職員の参加も増えてきており、「よのなか先生」と教職員の交流も深まってきた。

また、功績の大きい「よのなか先生」ならびに企業（講師派遣、キャリア教育全般に協力）を表彰し、その功に報いるとともに、広く市内外に周知してさらなる協力を得る手立てを講じている。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

中心となる事業として展開している「よのなか教室」の実施前には、必ず学校の担当者が「よのなか先生」の職場等に出向いて打合せを行うようにしている。その中で、先生方に新たな気づきや学び、アイデアが生まれ、その後の授業の工夫・充実につながっている。子供たちにとっては、普段先生から聞いていた話が、「よのなか先生」の話により、現実の生の社会でも同じであること（「挨拶は本当に大事である。」等）に気づき、社会への理解が一段と深まり成長するきっかけになっている。

「よのなか先生」を派遣する企業や団体にとってもメリットがある。例えば、若い社員、中堅社員が子供たちの前で話すことで、普段の仕事を一旦立ち止まって考える機会になり、自らの仕事観を見直す気づきになり、社員が成長する場になるという報告も受けている。

各学校で「よのなか教室」を実施した際には、ホームページに、企画の検討プロセス、成果だけでなく、工夫したこと、課題、子供の感想、活動の様子の写真などをできるだけ掲載するようにして、実績が他の学校に参考となり広がるように努力した。

※ H27年度 「よのなか教室」実施回数 96回 延べ参加児童生徒数 9020人

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

これまでに実施した「よのなか教室」の実績等をもとに、ねらいや概要、実施に向けた準備事項、実践例、効果等をまとめ、『よのなか教室』のすすめ」というDVDを作成し、県内の全ての小・中・高等学校、教育委員会、商工会議所、商工会、その他関係機関に配付した。(約500枚)それぞれの学校等では、研修等で活用してもらっている。

また、設置しているキャリア教育支援センターのコーディネーターを地域の様々な団体の会合に派遣し、「よのなか教室」の効果のアピールや「よのなか先生」への登録依頼を行っている。

さらに、商工会議所の主催で、日向市社会人5年未満研修会(民間企業、教職員、市行政の合同研修会)、日向市小規模事業者合同入社式、管理職研修会、教職員の日向市新赴任歓迎会等を企画・実施し、産業人材の育成という視点から「日向の人づくり」に地域ぐるみで取り組む環境作りに努めた。

学校現場の評価・感想・コメント

- ・若い「よのなか先生」が仕事について熱く語られる言葉や笑顔が印象的だった。「よのなか先生」の話は、教職員や地域の大人がまず聞くべきと感じた。未来の日向を築いていく人材育成に携わる我々の原動力になるからである。
- ・本校では、子供たちが「よのなか先生」にその道を決断した理由を問う。決断にはその人が大切にしている想いが根底にあるからである。「救いたい」「新しいものを創造したい」「役に立ちたい」などの多様な価値観の鍬を入れ、子供たちの未来への土壌を耕し、小さな芽が出てくることを期待している。

関係諸機関(行政・産業・地域団体等)からの評価・感想・コメントなど

- ・ふるさとを愛する心を育む学習を、どう結び付けるかがよのなか教室では大切。教員だけではできない。道徳教育の全体計画の中によのなか教室を位置付けたり、キャリア教育の全体計画の中に郷土愛を位置付けたりする必要があるのではないか。
- ・高校生が市内に就職しないが市内にも立派な企業が多い。市産業経済部としてはどうマッチングしていくか。高3のアンケートでは地元に残りたいが40%だったので、もっと前から手を打つということで、高2の進学希望者も含めて、15社の企業のプレゼンを聞く取組も行った。早い段階から日向市の素晴らしさを感じさせることが大切。課題はそのすばらしさの評価軸をどう設定するか。人口6万人の町の大人として、市職員が魅力を伝える訓練も必要である。行政の情報発信の一つとして「よのなか教室」をみてもいいのではないか。



<学級担任と「よのなか先生(新聞記者)」のチームティーチングによる国語の授業の様子>

【優秀賞】

団体名	大阪府立堺工科高等学校<定時制課程>
活動の内容（概要）	本団体は、地域の地場産業や各企業・店舗等で就業体験をした定時制課程の高校生が、自身の体験をもとに小学生の職業体験をサポートするプログラム「ゆめ・チャレ」を、大阪府教育庁、NPO、産業界と連携して実施しており、その規模を年々拡大させながら、地域に活力を生み出している。

受賞理由

- 大阪府教育庁、NPO、産業界と府立堺工科高等学校定時制課程との連携による、小学生の職業体験プログラム「ゆめ・チャレ」の実践は、高校生にとっては小学生に対して指導するというアクティブ・ラーニングの機会、小学生にとってはリアルな職業体験、協力事業所にとっては社会貢献及び活性化の機会となっている。
- 様々なキャリア教育における体験活動が実践されているが、社会人と児童生徒という関わりが一般的ななかで、定時制課程の生徒がサポート役で関わる例は特筆できる。
- 「ゆめ・チャレ」を体験する児童はもちろんのこと、支援する定時制課程生徒にも「地元産業の理解」「ボランティアシップ」「コミュニケーションスキル」等多くの教育的効果が期待できる。
- 高校生が学んだことを小学生に伝える異世代交流で取り組む地域理解など、他の地域でも取り組んでもらいたいプログラムである。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

大阪府教育庁、大阪府立堺工科高等学校（定時制の課程）、大阪府立大学、プール学院大学、プール学院短期大学、摂南大学、堺市立大仙小学校、堺市立熊野小学校、堺市立市小学校、堺市立錦小学校、堺市立錦西小学校、堺市立三国小学校、堺市立榎小学校、堺市立英彰小学校

【行政や地域・社会、産業界等】

大阪府教育庁、南大阪地域大学コンソーシアム、堺刃物商工業協同組合、堺線香工業協同組合、堺山之口連合商店街振興組合、大小路界隈夢倶楽部、（株）奥野晴明堂、味岡刃物製作所 等

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成25年～ 【継続年数】4年

これまでに地場産業をはじめ、様々な職業体験を実施してきたが、生徒は体験するだけでは仕事の内容等がよくわからないという現状であった。

体験した仕事内容をより深く理解するためには、教える側の立場に立つことが重要な事だと考え、本校生徒が職業体験をして仕事を理解し、小学生の職業体験をサポートするという「ゆめ・チャレ」プロジェクトを立ち上げた。

「協力性」についての具体的な取組, 工夫している点など

本校は「堺学」という授業で、伝統地場産業である「包丁作り」と「線香作り」を、地域の伝統工芸士の方々から学んでいる。本校生徒が作った「包丁」と「線香」及び義援金を東日本大震災の被災地に寄贈していることがマスコミ等に取り上げられ、本校の地場産業との取組が地域の方々の知るところとなり、学校と地域の企業・店舗が一緒に出来る取り組みについて考えようということになった。

地域の商店街と本校が協力して、「キッザニア」をモデルとした、小学生仕事体験事業の「ゆめ・チャレ」(夢に向かってチャレンジ)を立ち上げたが、まず多大な資金が必要であること(高校生・小学生の職業ごとのユニフォーム一式、材料費、会場費、講師謝金等その他諸々の経費)が課題となった。行き詰まった時に、大阪府教育委員会(現大阪府教育庁)にこの事業の趣旨説明を行うと、かなりの予算を計上して頂いた。また、企業・店舗側も小学生・高校生のキャリア教育の手助けが出来るなら、時間面・資金面において全面的に協力をして頂いている。堺市役所の方々も積極的に支持してくれ、関係機関・団体の協力要請もしてくれている。

「継続性」についての具体的な取組, 工夫している点など

小学生から職業意識を持つことは非常に重要なことで、自分が住んでいる地域の地場産業を知り、身近なところにある企業・店舗の仕事内容を体験することによって、「仕事」ということをより深く理解することは大切なことである。さらに、「仕事をする」ことにより「お給料」をもらうことが出来るという社会の構造をも理解することも出来る。

「ゆめ・チャレ」は、毎年6月頃に準備を始め、各企業・店舗等に協力依頼をし、学校内で検討を重ね、体験内容を決定していく。7、8月に本校生徒に仕事体験をさせ、仕事内容の理解と小学生に対するサポート内容の確認をする。10月頃までに本校職員及び企業・店舗ですべての内容を決定し、11月に小学校に案内チラシを配布し、12月に実施する。

体験後のアンケート等により、高校と小学校は、児童・生徒の職業意識について情報を得ることが出来、体験の在り方について改善点を見出し、企業・店舗側は、体験内容等についての改善点を見出すことが出来る。また、回を重ねるごとに応募者数が増加しているため、毎年受け入れ体制の充実を図り、次年度に向けて様々な工夫をしている。その他課題等があれば、地域と学校がすぐに対応し、改善している。

「実践性」についての具体的な取組, 工夫している点など

本校生徒の課題は自分に自信がもてず、コミュニケーション能力が低く、基本的な生活習慣が身につかず、昼間継続して働くことが出来ないという点であり、定時制高校本来の役割である勤労青少年の学び場でなくなりつつある。そこで本校においては以下の4点に取り組んでいる。

- ・ 伝統地場産業を学び、「ものづくり」を通じて地域に誇りを持ち、自分にも誇りを持つ。
- ・ 地場産業を通して学校外で様々な職業体験をし、基本的な生活習慣を身につけ、コミュニケーション能力等をつける。
- ・ ボランティア活動に積極的に参加し、他者から感謝されることにより自己有用感を持つ。
- ・ 小学生等に教える立場に立つことにより、自分に自信を持つ。

また、地域の課題としては、伝統地場産業の広報及び後継者問題、若い世代に対する伝統文化の継承、及び商店街の広報や活性化等があげられる。小学校の課題は、近隣の小学生が職業体験を通して交流し、学校の垣根を越えて「キャリア教育」について意見交換をする機会がなかった点である。「ゆめ・チャレ」事業はまさに、本校と小学校の課題と地域の課題を解決する取組である。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

「ゆめ・チャレ」は単なる職業体験やインターンシップではなく、高校生は小学生に仕事を教えることが出来るようにスキルアップし、小学生は体験ではなく、仕事に合ったユニフォームを着て仕事をする。それによって「お給料」をもらい、社会や経済についても学ぶことが出来るので本当の意味でのキャリア教育であると考えます。

学校と地域の連携が、地域の方々と生徒の成熟した関係を築き上げ、次なるステップに進んでいる。まず地域と共に「東北支援プロジェクト」を立ち上げ、本校生徒が作っ

た伝統地場産品を寄贈させて頂いたり、商品化した物を地域のイベントで販売し、売上金を義捐金として寄付し、被災地の支援をさせて頂いている。また、被災地の原料を用いて、地域の産業技術を用いて学生が商品開発をおこない、地域と被災地の交流を図り、様々な発信をしている。12月には本校生徒が中心となり、大阪府堺市の伝統地場産業の「線香」を用いて、世界最大のモザイク画による「ギネスブック」への挑戦が決定している。参加生徒のキャリアになることは間違いないことで、世界一が達成されることを願ってやまない。



<修了証とお給料をもらい記念撮影をしている様子>

学校現場の評価・感想・コメント

学校現場としては、「ゆめ・チャレ」に参加した本校生徒は、小学生をサポートするために一生懸命に仕事を覚え、戸惑っている小学生にアドバイス出来ることが嬉しくて仕方がない様子で、授業では見せたことのない生き生きとした表情をしているとの評価である。よって、生徒のキャリア教育の充実のために、今後も学校全体で重点的に取り組んでいかなければいけない行事であるという確認をした。また小学校においても、子どもたちが非常にいい笑顔で、真剣に体験している様子に感動したという評価を頂き、今後も継続してもらいたいというオファーがあり、非常に協力的である。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

「ゆめ・チャレ」については、大阪府教育庁の方々及び教職員の方々の依頼で、数回発表させて頂いており、高い評価を得ている。商店街、地域、小学校のPTAの方々からこれまでに例を見ない素晴らしいイベントと絶賛して頂いている。他府県からの講演依頼もあり、「ゆめ・チャレ」は全国のモデル事業になりつつあり、本校はパイロット校として活動してもらいたいという高い評価を得ている。地域団体や堺市の行政からも高い評価を得、今後も全面的に協力するというコメントを頂いている。



<茶道体験する小学生とサポートする高校生の様子>

【奨励賞】

団体名	一般社団法人 三重県技能士会
活動の内容（概要）	本団体は、小中学校に技能士を派遣し、児童生徒にもものづくりの楽しさや技能の大切さを実感させるために、制作過程を工夫するなど発達段階に応じた「ものづくり体験」の取組を行うとともに、毎年、関係団体と連携して県内各地で「ものづくりフェア」を開催している。

受賞理由

- 技能士会による小中学生を対象とした「ものづくり体験」の実践であり、24年間にわたり継続的に実践してきたこと、「ものづくり」をキャリア教育の中核と捉え「仕事」や「働くこと」についてシンプルな形で展開できていること、また、他の多くの地域で実践可能なモデルとなり得ることが評価できる。
- 地域技能士会の取組により、児童生徒にとって「ものづくり」がより身近なものとなり、技能士側にとってもひとつのやりがいを生み出すものと思われる。
- 日本の産業界は「ものづくり」で国際的な競争力を確保したが、その地歩が危ぶまれていることに対して、専門家集団の「技能士会」と連携して、24年間で、5職種から14職種に拡大し、「ものづくり体験」「ものづくりフェア」へと確実な発展がはかられている。
- 対象によって、指導内容を工夫するプロセスで、子供だけでなく大人の学びが醸成されていることが予想され、今後の活動に期待したい。子供たちの体験が将来活かされるだけでなく、地域づくりにつながっている。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

津市立小学校53校、津市立中学校22校、三重県教育委員会、津市教育委員会

【行政や地域・社会、産業界等】

津市商工観光部、三重県雇用経済部、三重金属工業株式会社、パナソニック株式会社エコソリューションズ社、日立金属株式会社、株式会社デンソー大安製作所、三重県職業能力開発協会

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成4年～ 【継続年数】24年

活動開始当初、当会は三重県庁の能力開発課に在籍し、主に三重県の要請を受けて活動を行っていた。県内技能士の団体・企業を集めて技能祭を毎年実施し、広く県民へ技能士の存在をアピールすることにより、来場者が興味を持ち、将来を担う子供達の職業選択の場にできればと技能士一同知恵と工夫を出して開催してきた。また、県内の技能グランプリを開催し、技能士がお互いに競うことによって、技能の研鑽を推進してきた。一方で、地域の学校や子供会等から、子供達に「ものづくり」の大切さを実感させ、家庭では使ったことのない道具や工具を使い本物に触れる機会を作ってほしいとの要望を受けたことで、現在の活動につながる小中学校を中心とした出前事業等を行うようになった。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

三重県技能士会では、津市教育委員会と連携し、早期からのキャリア教育の推進に取り組んでいる。小中学校においては、年度当初に津市教育委員会から事業内容を照会し、各校の要望に沿って事業を展開している。PTA活動の一環として位置付けている学校には、親子で協力して製作することを重視し、製作物を選定したり、卒業を目前に控えた中学校では、将来の職業選択を見据えて、多くの職種を用意して生徒が選択できるよう技能士を派遣するなど、各校のニーズを踏まえて内容を検討し、実施している。

また、特別支援学校においては、第一に児童生徒の安全を考慮し、派遣する技能士の数を増やしたり、比較的簡単に完成できるよう材料の下準備をしたりするなど、児童生徒の障がいの状況に応じた対応も行っている。

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

事業開始当初は、実施職種が5職種（屋根工事業組合・畳製作支部・寝具技能士会・フラワー装飾支部・建設労働組合）であったが、児童生徒により多くの情報発信ができるよう、当会所属の組合・支部と検討を重ね、職種の拡大を図り、現在は14職種まで体験可能となった。

また、児童生徒の発達段階に応じた体験内容にするため、同じ職種であっても、難易度の異なる作品を制作できるようにしたり、制作過程を簡略化したりするなど工夫している。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

将来を担う小中学生に「ものづくり」の大切さを実感させるために、発達段階に応じた作品作りを組合・支部（技能士）と検討している。

例えば、同じ木工体験でも小学生であれば材料を用意し、釘と金づちを使用した組立調整となるが、中学生であれば、材料を用意し、材料取り、鋸での切断、カンナでの削りなどの工程を経て、作品を仕上げていくようにしている。複雑な工程を経験することで、名称や用途を知ることができ、大工に対する深い理解にもつながっていく。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

これまでの実績から、学校を異動した教員が、転勤先の学校でも実施を考えるようになり、市内の小中学校で広がりがみられる。また、保護者も参加する学校があり、地域に活動に対する理解が広がってきている。

また、当会では、毎年10月に県内14市ある中の1市を会場に「ものづくりフェア」を開催したり、地域の祭りやイベントに参加したりしている。参加にあたっては、関係機関・関係団体と協力のうえ、一般市民にもものづくり体験の機会を提供することで、ものづくりに対する理解を深め、大切さを広めることを目的に活動している。

学校現場の評価・感想・コメント

- ・専門の職人に、ものづくりを教えてもらい、有意義な体験となった。
- ・「ものづくり体験」を通して、将来の職業について考える機会となった。
- ・たくさんの技能士を派遣してもらうことで安全に配慮して体験をすることができた。
- ・ものを作る楽しさを実感するとともに、製造業に興味関心を持つ機会となった。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

これまでキャリア教育の一環として、技能士会に講師派遣を依頼し、市内の小中学校でものづくり体験を実施してきた。小中学生に、実際にものづくりを体験させることで、ものづくりの楽しさを実感させることができている。それとともに、小中学生自らの職業選択に対する気付きや将来を見据えた職業観を培うことに役立っている。



＜光る泥団子作り教室の様子＞

（講師：三重県左官技能士会会員 5名）



＜座布団製作体験講座の様子＞

（講師：三重県寝具技能士会会員 6名）



＜木工教室の様子＞

（講師：三重県建設労働組合会員 8名）



＜フラワーアレンジメント教室の様子＞

（講師：フラワー装飾三重支部会員 8名）



＜ウェルカムボード教室の様子＞

（講師：広告美術仕上げ支部会員 2名）



＜壘花瓶敷き製作教室の様子＞

（講師：壘製作支部会員 5名）

【奨励賞】

団体名	講師派遣事業「地元企業からの学び」延岡市推進委員会
活動の内容（概要）	本団体は、「キャリア教育」「ふるさと教育」「理数教育」の三つを切り口として、ものづくり分野で活躍する企業で働く人を中心に講師として小中学校等に派遣し、ものづくりや科学技術に関する実験・実習等を通して、児童生徒の地元産業の理解促進等につながる取組を行っている。

受賞理由

- ・旭化成を中心としたものづくり企業が多く立地している地域の特性を活かし、ものづくり分野で活躍する社会人を、長年にわたって小中学校に講師派遣してきた実績が評価できる。
- 地元の社会人講師が、キャリア教育とともにふるさと教育を実施しており、地元志向を強めている。また、理科離れ、ひいては理工系人材の不足が懸念される中、学校と社会を繋ぐ理数教育を実施し、学生の興味・関心を高めている。
- ・地域企業の教育力を活かすという視点で活動が推進され、そのプロセスで企業、行政、学校等の連携・協働がすすんできたことがわかる。
- ・地域の企業等が中心となり講師派遣・出前授業等を実践している。「キャリア教育」の視点を中核に据えながらも、「ふるさと教育」「理数教育」の視点を明確に位置付け、総合的にキャリアや地域のことを学習する内容となっている。
- ・域内の全ての中学校で実施されており、隣接自治体にも広がっている。学校と企業で事業のねらいを共有するなど綿密な連携が図られている。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

延岡市立の全公立中学校16校、延岡市教育委員会 学校教育課、門川町立の全中学校2校、門川町教育委員会 教育総務課、日之影町立の全中学校1校(H27～)、日之影町教育委員会 総務課(H27～)

【行政や地域・社会、産業界等】

旭化成(株)延岡支社<15部場>、旭有機材(株)、清本鐵工(株)、九州電力(株)延岡営業所、宮崎ガス(株)延岡支店、佐藤焼酎製造場(株)、延岡鐵工団地協同組合<吉玉精鍍(株)・(有)花菱精板工業・(株)アドヴァンスカワベ・(株)池上鐵工所・向陽鐵工(株)・木村鐵化(株)・(株)修電舎・森山工業(株)・(株)共同設計・泰誠工業(株)・(株)昭和・太陽工業(株)・宮崎県機械技術センター> 等

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成11年～ 【継続年数】18年

旭化成(株)延岡支社、延岡市教育委員会、東臼杵教育事務所（現・北部教育事務所）各々の関係者が集った懇談会の中で、「地域の教育力を学校で生かせないか」という話がもち上がり、平成11年度に「塩の精製」というテーマで、浦城中学校（現・南浦中学校）で授業が行われたのが最初の授業である。この授業が反響を呼び、平成14年度から延岡市内の全公立中学校での実施へと移行した。平成20年度からは、隣接の日向市及び門川町内の全中学校も本事業に加わり、広域化した事業へと発展

してきている。その中で、日向市については平成23年度より独自に事業を立ち上げ、すべての小中学校を対象とした大規模な出前授業を展開している。このように、本事業は県北の延岡市が中心となり、多くの地元企業等の力をお借りしながら事業の拡大化を進めてきている。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

教育委員会が主催し、学校と企業の代表者を交えた推進会議を、年度当初と年度末の2回開催している。この推進会議では、学校と企業の一体的な事業の展開及び企業同士の横のつながりを深めるために、また、本事業のねらいとその成果を確認するために行うものである。特に、本事業が企業側にとって自社ブランドの価値自覚や業務への誇り等を感じてもらう重要な機会となるように、学校側と本音で語り合える協議や打合せを推進してきている。

また、旭化成(株)延岡支社主催の情報交換会（懇親会）により、学校関係者（校長・担当者）と企業担当者とは親睦を深める機会も設けていただいている。

このような取組により、企業同士で授業のノウハウを情報交換したり、他企業とタイアップして授業を行ったりする体制が自然と構築されてきており、18年目を迎える事業の土台となっている。

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

平成11年に旭化成(株)延岡支社1社と延岡市立浦城中学校1校から開始した本事業は、年々着実に協力企業を増やし、授業実施校及び実施学年を広げてきている。事業運営の実際としては、PDCAサイクルを基調とし、以下の手順で進めており、事業の改善に努めてきている。

4月…市教委担当者による協力企業の訪問（協力要請及び企業側の要望等の把握）

5月…第1回推進会議（趣旨説明及び前年度の成果・課題の確認、企業紹介、グループ協議）

7月…派遣企業決定及び事前打合せ会①(学校・企業担当者による事前・事後指導も含めた打合せ)

8～12月…事前打合せ②、授業内容実施、振り返り

（授業実施後に、生徒アンケート実施及び報告書提出）

2月…第2回推進会議（企業代表・学校代表による発表、成果・課題・次年度方向性等について検討）

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

延岡市が位置する県北地区は、旭化成(株)を中心に、ものづくりに関連する企業が多く立地する工業都市である。その地域的特性を活かしながら、実際の企業による出前授業においては、見学や講話だけではなく、企業の生産活動で用いる原理・現象等についての実験や実習、科学的な体験等を、出前授業の中に可能な限り位置付けてもらうようにし、それらと学校の授業を結び付けることで、学ぶことの意義や有用性、ものづくりの面白さ等を児童生徒が実感できるように企業側をお願いをしてきている。

併せて、本事業のねらい（キャリア教育・ふるさと教育・理数教育等）を達成するために、学校と企業側とは綿密な打合せ（2回以上）を行ったり、事前・事後学習を必ず位置付けるようにしたりして、授業が一過性のものに終わることがないように配慮している。

また、当初は企業から学校に出向いて授業を行う形が多かったが、現在はほとんどの授業が企業（工場）内で行われ、生徒に「現場」「現物」「現実」を実際に見せることで、世界を相手に仕事をしている企業が身近にたくさんあるということを実感させるようにしている。



<溶接の実演を見学している様子>

さらに、企業側の若手社員が、社員自身がなぜこの企業を選んだか、その達成のためにどのような努力をしたか、どのように失敗を乗り越えてきたかなどの「働くことの苦勞や喜び」を語らせることで、若手育成の側面も取り入れつつ、中学生のキャリア発達を促すことを目指している。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

本事業の趣旨及び実績が市内企業に広まり、本年度は、受入事業所が過去最大の33事業所になった。延岡鐵工団地協同組合は、今年度、新たに三つの加盟企業が加わって、鐵工団地全体として大規模校(学年147名)を一手に引き受けていただけることになっており、「大規模校では学年全員を一斉に授業参加させることが難しい。」という本事業の課題を解決する一歩を踏み出すことができたと思っている。また、隣接の日之影町教委からも昨年度に引き続き、中学校を本事業に参加させたいという要望があり、企業の好意的な協力を得て授業を計画することができた。日之影町のある西臼杵郡内の残り2町(高千穂町・五ヶ瀬町)も第1回推進会議に参加しており、次年度に向けて前向きに検討中とのことである。

このように、年々協力企業も増えており、参加する教育関係者も増えてきている。

学校現場の評価・感想・コメント

1 「キャリア教育」の観点から

チームで協力することの大切さや、分からなければ積極的に質問し、納得するまで挑戦することの大切さなど、働く上で必要な心構えを指導していただき、生徒のキャリア発達を促すことにつながった。

2 「ふるさと教育」の観点から

焼酎製造を通して、100年以上も前から「共生」の考え方を基に人や地域との密接な連携を大切にしている企業が地元延岡にあることを知り、郷土延岡への理解と愛情を育むことができた。

3 「理数教育」の観点から

すでに学習していた「燃焼」についての基礎を、実験や説明を通して確認することができた。また、事前にノーベルについての調べ学習をして臨み、爆薬の説明や爆破実験などの体験ができたことで、生徒たちの興味・関心をより高めさせることができた。

関係諸機関(行政・産業・地域団体等)からの評価・感想・コメントなど

1 「キャリア教育」の観点から

「勉強」と「研究」との違いを認識してもらい、自らの手で創意工夫した「研究」によって、誰も知らない新しい事実を発見する楽しさや達成感を味わってもらった。学校で学ぶ「勉強」はこれから訪れる課題へ立ち向かうための「研究」の大切な「ツール」であることを理解してもらったと思う。

2 「ふるさと教育」の観点から

自分に身近なものの一部が地元の企業で製作されていることを知っていただき、より地元の企業の素晴らしさを認識してもらえたと思う。そして、「ものづくり」に興味をもっていただいたことで、将来、自分自身が延岡に残って、日本や世界を支える人になることを少しでも意識していただけたのではないかと考えている。

3 「理数教育」の観点から

学校で勉強したことが、実際の企業の中でどのように実践されているのかを体験することは、生徒さんにとって得難い経験となり、科学に対する興味が湧いてくるのではないかとと思う。



<牛乳とオレンジジュースをろ過する実験の様子>

【審査委員会特別賞】

団体名	南相馬市未来へのつばさ育成プロジェクト
活動の内容（概要）	本団体は、子ども達が将来を前向きに捉え、社会に羽ばたく力をつけられるように、市内全中学校において、専門家と社会人による「出前講座」を提供し、各学年の成長にあわせ「夢の実現の仕方」「ビジネスマナー」「傾聴力」「インタビュー力」などのキャリア教育に取り組んでいる。

受賞理由

- 幅広い職種の体験や、いわゆるアクティブラーニングの手法なども採り入れた授業など、レベルの高いキャリア教育が市内の全中学校、全学年で行われており、福島復興を支える多様な人材づくりに寄与するプログラムであることが評価できる。
 - キャリア教育にフォーカスし、NPO、行政、企業が協働的に動いてきたプロセスには、熱い思いとともに、継続性のあるプログラムにすべき戦略と実行力、評価の視点がある。
 - 学校の状況を熟知したうえで、地域社会の強みを活かしたカリキュラムであるとともに、企業からの動きが生まれたことなど、社会にひらかれた教育課程の実現につながる、先進的な活動である。
- 震災後に産業構造をはじめ、地域の社会環境が激変するなか、子供たちに将来をポジティブに考えさせるという明確な目的が感じられる取組である。
- 子供の視野を広げる多種多様な講師による出前講座や「コミュニケーション」「ビジネスマナー」等のワークショップも企画され、創意工夫がなされている。
 - 東日本大震災被災から間を置くことなく活動を開始したことを高く評価したい。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

南相馬市教育委員会、南相馬市立中学校全校

【行政や地域・社会、産業界等】

NPO法人南相馬こどものつばさ、南相馬市市民生活部文化スポーツ課、NPO法人16歳の仕事塾、キャリアデザイン SAKURA

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成25年～ 【継続年数】4年

東日本大震災、福島第一原発の事故を受け、地域の産業構造が変わる中、子供達が将来を前向きに捉えることが難しくなっているとの指摘が教員やPTAから上がった。児童生徒対象に保養・交流キャンプを提供してきた南相馬こどものつばさは、市教育委員会の協力を得て、東京ほかの地域で職場体験キャンプを平成25年夏から開催、同時に市内原町第一中学校でコミュニケーション力講座の提供を開始した。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

キャリア教育キャンプは南相馬市PTA協議会および教職員を中心に作ったNPO法人南相馬こどものつばさが企画、運営をした。市内の小学5年生～中学2年生20名程が東京近郊の企業6社を訪問体験すると同時に、ビジネスマナーや「仕事と社会と自分について知るワークショップ」などを行った。被災地支援者のネットワークから企業に協力依頼したことによって、被災した子どもの状況に理解ある企業への訪問が可能となった。教育委員会および市内各小中学校は参加者募集にあたり、チラシの配布、学校放送での広報活動の支援をした。一方、キャンプで一部の生徒が体験するだけではなく、市内の全中学で1年生から3年生まで段階をおってキャリア教育授業を行う必要があるという考えのもと、教育長、教育委員会学校教育課が校長会に対し提案を行い、キャリア教育出前講座を各学年2時限行うことになった。教育委員会が全6校の日程の調整を担っている。学年ごとに実施適正時期を提案し、特に2年生の職場体験が有意義なものになるように、各校の進捗状況に合わせて、講座を提供できるように努めている。



<キャリアキャンプの仕事体験の様子>

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

当初少人数のキャリアキャンプからスタートしたが、地域の全生徒に社会に出る時に自信を持って前に進める力をつけてもらいたいと、全中学校での出前授業に集中する形に転換し、職場体験を実施する2年生については全学校、1・3年生については、3力年で全学校に提供できるように、段階を踏んで修正を加えながら行ってきた。実施後に各校担当教員、および参加した生徒にアンケートを実施。生徒、教員のニーズにあっているか、評価を確認することで、次回の内容の見直しを行っている。2年生については職場体験にその成果が生かされているのか、受け入れ企業などの反響も確認し、参考としている。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

第一原発事故による漁業、農業の操業停止や休止、工場などの撤退などにより、地域の産業構造が変化し、また大人たちの姿も希望に満ちたものばかりでない状況の中、地域外の人々の手を借りて「働くこと」の意義、楽しさを子ども達に伝えることは急務だった。そこで「出前講座」では、1年生にはキャリアカウンセラーによる「仕事について自分の関心や興味について知る」「夢の実現の仕方」の授業を行い、家業を継ぐなどの選択肢がなくなった生徒達にも、早い段階で幅広い仕事について知り、自分の可能性を知る機会を提供している。2年生は秋に職場体験を行うが、震災後避難生活などによる課題を抱えた生徒への対応などで多忙な教員をサポートするためにも、事前に「ビジネスマナー」「コミュニケーションの大事さ」の授業を行っている。3年生には、進路を現実的に考える時期とい



<インタビューワークショップの様子>

うことで、社会人の先輩にインタビューをするワークショップを実施している。地域の事業所が減り、復興で多忙な中で、招く人材は、市内に限定せず、世界をまたにかけて働いている人、被災地復興に取り組んでいる人、困難を克服して夢を実現した人など、子どもたちの視野を広げ、支えになる話しが出来る方に依頼している。全てのプログラムにおいて学校の教科学習の意欲も高めることにつながるように内容を考慮し実施している。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

NPO 法人南相馬こどものつばさは、市内小中学校のPTA 協議会と教員有志を多く会員に持つという背景から、キャリア教育の実施についても地域の保護者からの支援を得て行ってきた。各校のPTA 関係者が授業を参観し、意見交換したり、外部からの講師を市内の被災状況見学の案内などを行ってくれるなどをして、授業内容の充実に寄与している。市広報誌ほか、地域の新聞やラジオ局に取材を積極的に呼びかけ、受け入れることで、地域に広く活動内容を知らしめている。域内の企業経営者や、ハローワークからの見学、今後の連携の可能性についての申し出があるなど、地域内でのキャリア教育推進への機運を高めている。社会人講師として訪れたエンジンの専門家が、地域のロボット産業界との連携したプログラムを展開できないか模索するなど、外からの目で地域の財産を見直し、活かす授業作りなども検討している。

学校現場の評価・感想・コメント

生徒のアンケートでのキャリア教育出前講座の満足度は、どの学年でも「満足」と答える生徒が80%を超えるという結果となっている。生徒からは「自分の夢をかなえるためにこれからどうすればいいかを考えることができた。」(1年生)「第一印象が大事なので、明るく元気な印象を与えたいと思いました。ペアでいろいろゆったりして楽しかったです。」(2年生)「自分の進路についてもう一度考えてみようと思った」「今、勉強をしなければならなかった。夢を持つ大切さを学んだ。」(3年生)など、前向きな感想が寄せられている。学校からは「生徒が講座の後早速実行したり、教師の指導もしやすくなった」「生徒が何かを始めようとする意識作りにとっても役立った」「職場体験の基礎となり得る授業だった」との評価も高く、継続して事業を進めてほしいという要望が多い。



<多様な仕事と自分の関心を知るワークショップの様子>

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

NPO 法人南相馬こどものつばさは、出前授業の前身であるキャリアキャンプの企画実施と出前講座のプログラム内容作りに携わってきたが、なによりも市教育委員会が講座を全中学校で実施することが非常に良かったと感じている。自分の未来を前向きに考え、実行していく方法や技術を知ることは被災後の不安定な状況にある中学生にとって必要だとして、教員、カウンセラーたちと意見交換しプログラム内容を練ってきたが、4年目の今年学校を訪れると生徒のコミュニケーション力などが上がっていると実感できた。社会人講師からも、生徒の質問内容のレベルが高いとの評価をいただき、職場体験先の事業所から生徒の挨拶や態度が好評であることを大変喜ばしく感じている。

【審査委員会特別賞】

団体名	阿蘇市キャリア・スタート・ウィーク実行委員会
活動の内容（概要）	本団体は、キャリア教育の意義・目的を吟味し、産業界、教育界、労働界、行政が連携を図りながら、職場体験の円滑な支援システムを構築し、中学生の5日間の職場体験活動を中心に、子どもたちに望ましい勤労観・職業観を育むための取組を実施している。

受賞理由

- ・実行委員会が、キャリア教育の意義・目的を吟味し、職場体験を中心にそのプログラムを丁寧にコーディネートしており、行政、外部機関、学校、地域（事業所等）と連携を確実に図ることにより、質の高いキャリア教育が推進できる取組となっていることが評価できる。
- ・職場体験活動を行うに当たって、挨拶やマナーの向上を図るという視点を、学校と事業所が共有して持っていることが、取組を充実したものにしている。
- ・産業界・教育界・労働界・行政が連携を図りながら、子どもたちに望ましい勤労観・職業観を育むための取組を継続して実施し、連携事業種が年々拡大している取組である。
- ・産学官が一体となって、地域でキャリア教育を推進することができている。グローバルな人材育成を進め、実際に地元就職者が出るなどの成果が上がっている。
- ・被災地であることから、様々な苦労を乗り越えながら取組を拡充していることも評価できる。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

阿蘇市内小中学校（小学校6校、中学校3校）、県立阿蘇中央高等学校、阿蘇市教育委員会（教育長、教育部長、課長、課長補佐、学務係長、学校教育指導主事）

【行政や地域・社会、産業界等】

熊本県商工観光労働部商工労働局労働雇用課ジョブカフェ阿蘇、ハローワーク阿蘇(阿蘇公共職業安定所)、阿蘇市PTA連絡協議会、阿蘇市商工会、阿蘇市観光協会

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成20年～ 【継続年数】9年

熊本県では、平成18年度から知事部局の労働雇用総室が中心となって、キャリア教育の推進を支援する事業が進められてきた。平成19年度には、「キャリア教育産・学・行政連携推進会議」が設置されるとともに、「熊本県『人財』育成プロジェクト」に基づいた具体的な事業が展開されている。

このような県全体の状況と、阿蘇市の中学生の課題として、働くことへの関心意欲、勤労観・職業観の未熟さ、コミュニケーション能力不足など、職業人としての資質能力の低下等が懸念されていた現状から、阿蘇市の職場体験の円滑な支援システムづくりの構築を図り、児童生徒の望ましい勤労観・職業観を育むために、平成20年度から阿蘇市キャリア・スタート・ウィーク実行委員会を立ち上げ、活動を開始した。

「協力性」についての具体的な取組, 工夫している点など

- 1 阿蘇市キャリア・スタート・ウィーク実行委員会設置要綱と年間2回の実行委員会
 - ・目的, 組織, 事業内容等を定め, 活動, 役割について共通理解を図る。
 - ・県労働雇用課ジョブカフェ阿蘇, 阿蘇中央高等学校がオブザーバーで入り, ハローワークとともに, 就職や事業所状況などの情報交換や成果と課題の検討内容などをキャリア教育に生かしている。
- 2 実行委員会の具体的活動内容
 - (1) 受入事業所の登録と開拓を行い, 職場体験学習のスムーズな実施を図る。
 - (2) 毎年, 成果や課題を検討し, 事業所に働きかけたり, 学校での指導に生かしている。
 - (3) 受入可の事業所が減少状況のとき, 事業所への感謝の気持ちを大事にするよう生徒に指導するなどの対策を図ることで事業所の協力が増えた。

「継続性」についての具体的な取組, 工夫している点など

- 1 交代のある実行委員や事業所へ目的及び趣旨を文書にて明記し, 依頼する。
- 2 学校と連携して「年間指導計画書」を作成するが, 学校が作成しているキャリア教育全体計画・年間指導計画と照らし合わせて, 実行委員会で「年間指導計画」及び「職場体験学習の意義」について確認するとともに検討する。
- 3 職場体験が終了したら, 事後学習で職場体験新聞等を書いて発表し合い, 感想を書いたお礼の手紙とともに新聞も事業所へ持参する。事業所ではその新聞や感想文を掲示している。
- 4 生徒と事業所のアンケートを集約し, 成果と課題を明確にして次年度へつなぐ。



<お礼の手紙>

「実践性」についての具体的な取組, 工夫している点など

- 1 実行委員会の活動内容について見直す。

「児童生徒の地域での態度や地域への就職状況について, 情報や意見交換をする」という項目を入れて, 学校外から見えている児童生徒のあいさつやマナー, 生徒の阿蘇市への就職状況等について情報交換し, 今後の指導に生かしている。
- 2 「阿蘇は観光地でもあり, あいさつやマナーを育成してほしい」という意見から, 学校や事業所へ改善点として指導を依頼した。

「ここ数年の職場体験学習でのあいさつやマナーの指導が, 学校や事業所で根づいてきて地域で褒められることが多くなった。観光地阿蘇としてはとてもありがたい。」という感想が観光協会長よりあった。
- 3 「阿蘇への誇りや自信をつけてほしい。それが職業への一番の力になる。」との観光協会, ハローワーク阿蘇, 県労働雇用課からの要望に対応している。

事前事後学習で阿蘇の文化遺産や阿蘇の特産物などの学習, 観光業の事業所などの取組から学ぶ職業講話など, 職場体験学習の幅を広げる工夫をしている(中学校)。



<図書館での職場体験の様子>

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

1 阿蘇市では「阿蘇市キャリア・スタート・ウィーク実行委員会」の9年間の取組により、学校、地域事業所、保護者のキャリア教育への理解と協力が高まってきている。事業所自体が積極的に世界に誇る阿蘇の特産品の開拓やジオパーク、世界文化遺産の取組などに誇りをもって活動している状況であり、「阿蘇への誇りを持った児童生徒の育成」にも積極的に取り組んでもらっている。

2 具体的事例

(1) コミュニティ・スクールでの地域と連携した活動に積極的に取り組んでいる事業所や、「ようこそ先輩」「地域で頑張っている事業主の方に話を聞く」や日本で活躍中の実業家などによる職業講話など、グローバルな人材活用により、生徒の勤労観、職業への意識を高めている。

(2) 「5日間は長すぎる3日間にしてほしい」という学校や一部事業所からの要望の検討

学校現場の評価・感想・コメント

・阿蘇市に赴任する前は、学校が1軒1軒事業所を回って依頼に行っていた。大変な作業のわりには、成果も上がりにくかった。阿蘇市は実行委員会があり、生徒の職業選択も広がり、様々な立場から多くの協力を得て児童生徒の将来を見守ってもらっているので、阿蘇市でのキャリア教育は積極的にやりやすく、生徒の意欲も高い。

・職場体験学習をすることで、自分の特技長所、職業選択など考えてもいなかった生徒が、職業や働くことを自分のこととして考え、進路意識を高めることができた。また、中学2年生で職場体験学習をすることで、あいさつや掃除、マナーなどの大切さを学び、その後の生活態度に大きく影響し、充実した学校生活を送ることができるようになっていく。

・事業所の実施後のアンケートに「大変忙しいときに指導は大変であるが、生徒が日に日に仕事を覚え、態度もしっかりしてくるのが楽しく、いつも楽しみにしている。」という感想をいただき、5日間の体験が大きな成果を上げていることを実感している。



<消防本部での職場体験の様子>

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

・この実行委員会に一番長く出席させてもらっているが、行政と学校、学校と事業所が大変上手くいき、生徒のあいさつやマナーがよくなってきている。事務局の苦勞が実っていると思う。今後もぜひこの取組を続け、阿蘇市の児童生徒の健全育成を図ってほしい。

・学校や事業所の指導がありがたい。これからも外へ出て阿蘇の自慢ができる生徒に育ててほしい。

・高校生のインターンシップのアンケートに、「自分のコミュニケーション能力不足を感じる」「学校の勉強をもっとしておけばよかった」などあり、実行委員会で生徒の姿を共有し、実践に生かしてほしい。

・この実行委員会の取組には、学校と地域の一体感を感じた。阿蘇の産業の理解を深め、将来阿蘇を活性化する人材を育成してほしい。そのために、事後学習の発表会等に事業所を招待したり、広報を行ったりして、地域をさらに活性化させてほしい。